

実践事例① 墨田区立小梅小学校

1 取組・活動名

「障害者理解の促進」

2 取組・活動のねらい

- オリンピック・パラリンピック教育に関するアンケート調査(対象4～6年生、質問18項目)から、児童の約4割が高齢者・障害者との交流経験が乏しいことや、約8割が障害者スポーツ(パラスポーツ)を身近に感じていないという実態が判明した。
- 一方、「障害のある方と交流したい。」「パラスポーツを見たい。」という児童が約7割を占めた。
- これらのことから、パラアスリートや関係者をはじめ、障害者理解の促進・啓発に関わっている方々を講師として招き、特別授業を開催することにより児童の関心を高めることを目指した。

3 教育課程上の位置付け

「総合的な学習の時間ほか・10時間程度」

4 実施上の工夫

- ・ 児童の関心を高めるため、アイススレッジホッケー、ブラインドサッカー(視覚障害者5人制サッカー)、CPサッカー(脳性まひ者7人制サッカー)、陸上競技(走り幅跳び、100m)と、異なるパラスポーツを取り上げた。
- ・ 特別授業の開催について、告知ポスターや学校ホームページなどで保護者・地域にも広く周知し、参観者を募った。
- ・ 講師の活躍を記録した映像を観たり、著書を読んだりする事前学習を取り入れた。

5 本取組・活動の内容

パラリンピアンによる特別授業『夢が一番のエネルギー』



- ・ 子供の頃の様子や競技を始めた理由、海外修行の苦労話などを分かりやすく話して下さった。車いすを自在に操る姿に歓声が上がった。全ての児童がパラリンピックの銀メダルを全児童が手にすることができ、大きさや重さを肌で感じ、感激していた。
- ・ 「今、マイナスだと思っていることがいつか必ずプラスになります。マイナスは、決してマイナスではありません。」というメッセージが印象的であった。

パラアスリートによる特別授業『かとけん先生のブラサカ教室』



- ・ デモンストレーションとして披露した「8の字ドリブル」。正確なボールコントロールと、もの凄いスピードで3mほど離れた教員の間をドリブルする姿に、児童は圧倒された。
- ・ アイマスクを装着し、かすかに鳴る専用ボールの音だけを頼りにボールを蹴ったが、狙った方向へ転がす難しさを実感した。
- ・ 「(何事も)始めなければ、始まらない。」というチャレンジ精神を学ぶ絶好の機会となった。

パラリンピアン、義肢装具士による特別授業

『転んでも、大丈夫 ～義足ってカッコいい!～』



- ・ 児童は体験用義足を装着し、実際に義足で歩く体験をした。義足で歩く難しさを実感することにより、全力で走ったり、跳んだりするパラアスリートの技術力の高さと勇氣に感心していた。
- ・ また、事前に講師の活躍を記録した映像を観たり、著書を読んだりしていたので、興味をもって臨むことができた。
- ・ 直前に行われたリオデジャネイロパラリンピックの話を知ることができ、3年後の東京大会を身近に感じることができた。

6 成果

- ・ オリンピック・パラリンピック教育に関するアンケート調査(東京都教育委員会)から、児童の実態を客観的に把握することができた。
- ・ オリンピック・パラリンピック教育重点校として、計7人の講師を招くことができた。特別授業を数多く開催することにより、障害者理解の促進、重要性について児童だけでなく保護者・地域、教職員も意識することができた。
- ・ 東京都や東京都教育委員が制作した『オリンピック・パラリンピック教育映像教材』『広げよう障害者スポーツ～誰もが生涯を通じてスポーツを楽しむために～』『障害者スポーツ普及啓発映像 Be The HERO』などの映像資料や、『オリンピック・パラリンピック学習読本(小学校編)』を活用して事前・事後学習に取り組んだことにより、障害者理解の促進をより効果的に図ることができた。
- ・ 墨田区教育委員会主催のオリンピック・パラリンピック教育担当者連絡会において、取組実践を発表する機会に恵まれ、効果的に他校に周知することができた。
- ・ 多様性を認め合い、互いの違いを尊重することができる児童の育成を意図的・計画的に進めることができた。

実践事例② 江東区立東陽小学校

1 取組・活動名

「4年 よりよく関わり合うために」

2 取組・活動のねらい

- 障害者と触れ合ったり、実際に体験したりすることで、障害についての理解を深める。
- オリンピック会場となる自分たちの町のバリアフリーについて知る。
- パラリンピアンとの交流を通し、パラリンピックについての理解を深める。
- 調べたり、体験したりしたことを新聞やパンフレットにまとめ発表し合う。

3 教育課程上の位置付け

「総合的な学習の時間・10時間」

障害者と盲導犬との交流(2時間)

義足体験・パラリンピアン交流(2時間)

江東区まちづくり課・ボランティアセンター訪問(2時間)

調べ・まとめ(4時間)

4 実施上の工夫

- ・ アイマスク体験や車椅子体験、義足体験など、実際に障害を体験する。
- ・ 障害者の方のお話を聞いたり、介助犬(盲導犬)と触れ合ったりすることで障害者の生き方や苦勞などを知る。
- ・ 江東区まちづくり課、江東区ボランティアセンターによる出前授業を実施し、オリンピックに向けての街づくりの様子やバリアフリーについての理解を深める。
- ・ パラリンピアンと交流し、パラリンピックについて理解を深める。

5 本取組・活動の内容



- ・ 江東区まちづくり課と江東区ボランティアセンターに協力いただき、障害者の方々と交流した。
- ・ 自分たちが暮らす街、江東区がオリンピック開催に向けて変わっていくこと、また、段差や階段、歩道等の凸凹を車椅子やアイマスクをつけて歩いて体験し、障害者にとってやさしい街になっているのかを知り、さらに、バリアフリーやユニバーサルデザインを進めていくことの大切さを学んだ。



- ・ 「盲導犬ベルナ」の作者と、盲導犬と交流し、盲導犬についてのお話を伺った。
- ・ 視覚障害のある方の苦勞や普段の生活の様子について、障害者にどう接し、手助けをしてあげるといいのかを学んだ。また、お札をどうやって判断しているかなど、アイマスクをつけて体験した。



- ・ リオパラリンピック陸上4×100リレー銅メダリストと義足体験を実施した。
- ・ パラリンピアンから、自身が右足を失い義足になったこと、競技用義足と出会い陸上を始めパラリンピックを目指したこと、リオパラリンピックの様子等のお話を聞いた後、義足体験を行い、少しの段差でも歩きにくいことや、義足によって健常者と同じ生活が容易であることを学んだ。

6 成果

- ・ 実際にアイマスクや義足を体験したことで、障害についての理解が深まり、障害者にとって日常生活での不自由さなどについて共感しやすくなった。
- ・ 障害者と触れ合うことで、どう介助すればよいのか、どんなことで協力できるのかを考えるきっかけとなった。また、差別意識や偏見をもたないようになった。
- ・ 区役所や公営機関に協力していただいたことで、自分たちが住む街についての関心が高まり、東京2020大会に向けて、バリアフリーやユニバーサルデザインをさらに進めていく必要があると感じる児童が増えた。
- ・ リオパラリンピック競技大会出場メダリストとの交流を通して、障害についてのみの理解に留まらず、アスリートの生き方や障害に負けず夢を追いかける強い心について学び、今後の学校生活に生かそうと感じることができた。
- ・ オリンピック・パラリンピックの競技会場が自分たちの住む街にできることを実感でき、夢が広がった。

実践事例③ 世田谷区立弦巻小学校

1 取組・活動名

「みんな友だち」

2 取組・活動のねらい

- 障害のある友達とかかわることによって、共生の心を育てる。
- 障害のある人についての知識を獲得し、理解を深める。
- 優しい社会とはどういうものか考え、相手の立場になって行動する態度を養う。

3 教育課程上の位置付け

「総合的な学習の時間・10時間」

4 実施上の工夫

- ・ 本校の特別支援学級の児童と交流することによって、一人ひとりの違いやよさに気付かせる。
- ・ 交流給食や交流遊びを通して、障害についての理解を深め、相手意識をもったコミュニケーションが図れるようにする。
- ・ 学習を振り返ることによって、児童が今後の学校生活や社会生活に生かせるようにする。

5 本取組・活動の内容



- ・ グループごとに交流給食をしている場面。
- ・ 自己紹介したり、好きな勉強や遊びについて話したり、コミュニケーションを図りながら、互いに人間関係を築いていく。
- ・ 会話やかかわり方でうまくいかないことがあることに気づき、障害についての理解や相手意識をもった行動につながる。



- ・ クラスごとに特別支援学級の児童とどんな遊びをしたらよいかを考え、話し合いをし、交流遊びを楽しんでいる場面。
- ・ 自分たちだけでなく、相手も楽しめるよう、ルールについても工夫をしている。



- ・ 雨天時に、室内での交流遊びを計画・準備し、一緒に楽しんでいる場面。
- ・ 計画の際、相手の好きな遊びや音楽など、会話やインタビューをして得た情報を生かしている。

6 成果

- ・ 学習前と比べて、特別支援学級の児童と親しくなり、日常から挨拶や言葉をかけ合うような友達になることができた。
- ・ 障害者理解についての認識を深めることができた。
- ・ 相手意識をもった考え方やコミュニケーションの取り方が、以前よりもできるようになった。相手の立場を想像した態度や行動を示すようになった。
- ・ 優しい気持ちをもって、人と接することができるようになった。
- ・ 様々な体験学習を通して、自分の心身への関心及び共生社会に対する意識を高めることができた。

実践事例④ 中野区立中野本郷小学校

1 取組・活動名

「オリンピック・パラリンピックから学ぼう」

2 取組・活動のねらい

- 児童に、日常的な運動・スポーツの実践による健康増進に興味・関心をもたせ体力向上を図る。
- 首都東京で学ぶことに誇りをもたせ、招致されるオリンピック・パラリンピックを生かして平和な社会の実現にすすんで貢献しようとする児童を育てる。
- 障害者理解教育を推進し、児童の人権意識を向上させる。

3 教育課程上の位置付け

- 生活科・特別活動・総合的な学習の時間 20時間

4 実施上の工夫

- オリンピック・パラリンピック教育において重要な事項として、体験や選手の方々から話を聞いたり教えてもらったりする場面を設定した。
- 障害者スポーツのひとつである「車椅子バスケットボール」を児童が体験し、障害者スポーツについてについて知るとともに、様々な工夫や努力について理解を深められるようにした。

5 本取組・活動の内容



「障害者スポーツを実践している方の講演会を開催①」

期日：平成28年11月24日

対象：全校児童 特別活動1時間

講師：リオ・パラリンピック日本代表
選手

(車椅子バスケットボール)



「障害者スポーツを実践している方の講演会を開催②」

期日：平成29年2月6日

対象：全校児童 特別活動1時間

講師：バンクーバー・パラリンピック
銀メダリスト

(アイススレッジホッケー)



「車椅子バスケットボールを体験」

障害者スポーツ体験を通して「車椅子バスケットボールでは足が使えないこと」に対しての苦労や努力、様々な工夫について理解を深めることができた。

- ・ さらに、用具・器具を活用することで児童が「自分たちも障害のある方々とスポーツができる」という体験ができ、共生の心を深めることができた。

6 成果

- パラリンピアンとの交流から、スポーツの魅力や楽しさに触れ、自らすすんで運動に親しもうとする意識を向上させることができた。
- 2020年に東京でオリンピック・パラリンピックが開催されることの意義について確認し、平和な国際社会への貢献のために自分ができることを考えることにつながった。
- 障害や障害者スポーツについて知り、障害のある方々の考えや日々の努力について理解を深めることができた
- パラリンピックの競技は、用具・器具を使用すれば健常者も一緒に楽しめるスポーツであることに気付き、共生できることの大切さを実感した。

実践事例⑤ 豊島区立要小学校

1 取組・活動名

「オリンピック・パラリンピック教育～障害者理解の促進～」

2 取組・活動のねらい

- 「すべての人の自立と社会参加を目指して」をテーマに、学校教育でできることは何かを考え、「子供たちの価値観を変えることが社会を変えることにつながっていく」という信念のもと、体験活動を充実させた取組を行う。
- パラスリートとの交流を通して、障害理解を促進する。
 - ・ 車椅子バスケットボール選手による講演会(全校)
 - ・ 5,6年生車椅子バスケットボール体験学習・給食交流
 - ・ 陸上競技選手とのスポーツ用義足体験授業、義足についての講義(6年)、給食交流
 - ・ 選手によるウィルチェアーラグビー講演会、デモンストレーション(全校)
- 福祉体験によるボランティアマインドの醸成をねらいとして、豊島区社会福祉協議会による車椅子体験学習(5,6年)を実施した。
- 視覚障害について理解を深めるため、盲導犬ユーザーによる講演会(4年)を実施した。

3 教育課程上の位置付け

「国語、社会、生活、音楽、体育、道徳、外国語、総合的な学習の時間、学活等」
各学年でオリンピック・パラリンピック教育に関連付けた授業を実施

4 実施上の工夫

- ・ 各学年の発達段階と各教科の年間指導計画に基づき、年間を通してオリンピック・パラリンピック教育を実施した。1学期は調べ学習と福祉体験を中心に、2学期はアスリートを招いた講演会やパラスポーツの体験を中心に、3学期はマラソン月間や縄跳び月間などの教育活動と関連付けて、講師による特別授業を中心に取り組んだ。
- ・ 講師の先生方やアスリートの方との交流を深めるために、給食交流を通して児童の素朴な疑問にも丁寧に答えていただいたり、講演会では聞くことができなかった選手の日常を知ったりすることで、障害者理解を促進した。
- ・ 予算配付の関係から、6月頃までに講師を決めることは難しいが、ある程度日程と学習内容計画を決めて関連団体との連絡を取り始めておかないと、都内の学校が一斉に動き出す頃には予約ができない状況になる。そこで、1学期は予算的に負担の無い活動(図書館を活用した調べ学習や、区の社会福祉協議会との連携授業)を中心に実施した。

5 本取組・活動の内容



「パラアスリート交流（陸上競技）」

- ・ 陸上競技選手を招き、スポーツ用義足体験学習を実施した（6年）。
- ・ 教室で義足について特別授業を実施した。
- ・ 給食交流では、子供たちの素朴な疑問に答えていただき交流を深めた。



「パラアスリート交流（車椅子バスケットボール）」

- ・ 車椅子バスケットボールチーム千葉ホークスのキャプテンによる講演会を実施した（全校児童）。
- ・ 5、6年生は、車椅子バスケットボールの体験学習を実施した。
- ・ サポーターの方との給食交流も行った。



「豊島区社会福祉協議会との連携授業 （総合的な学習の時間テーマ「福祉」）」

- ・ 車いす体験学習の実施（5、6年生）。
※29年度は4、5年生
※30年度以降は4年生の学習活動
- ・ 盲導犬ユーザーの方による実演・講演会の実施（4年生）。

6 成果

- ・ 児童、保護者、教職員、地域の方が一体となって障害者理解を深める活動となった。
- ・ 一人一人が障害のあることについて深く考え、これからもよりよく生きていこうとすることや、障害のある方とどのように関わりをもてばよいか、体験的・主体的に学ぶことができた。
- ・ 平成29年度のオリンピック・パラリンピック教育の活動でも継続的に取り組むことができている。
- ・ 児童の感想から
「障害のあることがかわいそうなことだと思っていました。けれど、できないことを考えるのではなく、どうやったらできるのかを考えればよい、ということを知り、夢をもって生きていくことの大切さを学びました。」
「障害者を差別することは絶対に許せません。これからは、障害のある人にもやさしく接していきます。」
「車いすに乗っていると、小さな段差も恐く感じることや、車いすを押してあげるときには『曲がります、段差があります』などの声かけをすると安心して乗っていただけることを学びました。また、盲導犬などを町で見かけたときには、仕事上の盲導犬にむやみに触らないことも学びました。」
- ・ 保護者の感想から
「たくさんの方との交流を通して、子供たちが普段できない良い経験をしていると感じる。これからもこのような学習を継続してほしい。」

実践事例⑥ 板橋区立蓮根小学校

1 取組・活動名

「共に生きる」～福祉について考えよう～

2 取組・活動のねらい

- アイマスクや疑似体験セットなどを活用し、高齢者・障害者の生活を想起する活動を通して、社会福祉の必要性について考える。
- 高齢者・障害者に関わる福祉について調べ、自分の暮らす地域社会に福祉の考えが活かされていることや、さらに発展させていく必要があることを知る。
- 訪問・交流活動を通して、高齢者・障害者と自分の関わりについて考えを深める。

3 教育課程上の位置付け

「総合的な学習の時間・20時間」

4 実施上の工夫

<福祉施設訪問>

- ・ 近隣の福祉施設に訪問する機会を設け、交流会を行う。実際に交流することで、先入観から生まれる偏見を払拭し、よりよい関わり方について考えを深める。

<ゲストティーチャーによる出前授業>

- ・ 地域に暮らす障害がある方やパラリンピックに出場したアスリートを講師に迎え、講話を聞くと共に義足や車いすの体験を行うことで、生活する上での工夫や一つ一つの取り組みに対する努力についての理解を深める。
- ・ また、障害者のガイドヘルプ体験を行うことで、自分との関わりについて考えを深める。

5 本取組・活動の内容



「体験の様子」

- ・ 高齢者・障害者疑似体験セットを身につけて校内を歩いた。普段は気付かない段差の不便さや手すりの有用性に気付き、バリアフリーの必要性について考えを繋げた。
- ・ その後、街中や施設においてどのような取組がなされている調べ、報告会を行った。



「パラリンピアン」の講演の様子」

- ・ パラリンピアンを講師に迎え、講話を聞いた。障害を負った時の挫折や、そこから前向きに取り組んできた経験を聞くことで、障害者に対する認識を深めることができた。
- ・ また、義足体験では、障害者スポーツについて知るとともに、一緒に運動を楽しむことができた。



「地域の方」の講演の様子」

- ・ NGO団体を通じて、地域の障害がある方を招き講話を聞いた。普段の生活や、障害者ならではの苦労や、それに対する対応方法などを知ることで、障害に対する認識を深めることができた。
- ・ また、介助をするガイドヘルプ体験では、障害者の視点で身の回りを見直すことができ、バリアフリーの大切さを実感することができた。

6 成果

- ・ 高齢者や障害者をより身近に感じることができ、それらの人々の問題について必要感をもって考えることができた。
- ・ 実際にパラリンピックに出場した選手から直接講話を聞くことで、障害があっても自分たちと同じように夢を追いかけ、努力し、実現させていることを知り、障害者に対する認識を深めることができた。
- ・ 様々な体験を通して、身の回りの福祉のあり方について考えることができ、街中や施設について、バリアフリーの視点を伴って捉え直すことができた。
- ・ ガイドヘルプなどの活動を通して、障害者を介助する具体的な方法や注意点を学ぶことができた。

実践事例⑦ 江戸川区立本一色小学校

1 取組・活動名

「福祉について考えよう ～優しさいっぱい本一色っ子～」

2 取組・活動のねらい

- ブラインドサッカーの体験を通して障害者スポーツを知り、障害への理解を深める。
- 障害があることを体験することで、障害者が困っていることに気付き、自分にできることを考える。
- 高齢者との交流を通して共に生きることの大切さを知り、相手の立場に立って自分にできることを考える。

3 教育課程上の位置付け

「総合的な学習の時間・20時間」

4 実施上の工夫

- ・ ブラインドサッカーを体験するため、外部講師としてアスリートを招く。
- ・ 障害があることを体験させるため、外部講師として江戸川ボランティアセンターの方を招き、点字ブロック等の具体物を準備する。
- ・ 高齢者と触れ合うため、地域の高齢者施設を訪問する。

5 本取組・活動の内容



「ブラインドサッカーに挑戦してみよう。」

- ・ ブラインドサッカーのアスリートをゲストティーチャーとして招き、アイマスクをした状態での体操や、二人組で歩いたりした後、ボールのトラップやパスを行った。
- ・ 障害のある人も自分たちにできるスポーツを楽しみ、精一杯努力していることが理解できた。



「障害があることを体験してみよう。」

- ・ 江戸川ボランティアセンターの方を招き、視覚障害について学習した。
- ・ アイマスクをして歩くことにより、視覚障害者が道路を歩くときにどんなことに困っているかを知り、自分たちができることは何かということについて、体験を通して学んだ。
- ・ その他、簡単な手話について学んだ。



「地域の高齢者の方と交流しよう。」

- ・ これまでの学習を生かして、地域の高齢者施設を訪問し交流した。
- ・ どうやったら高齢者の人に楽しんでもらえるかを考え、自分たちで計画し活動した。
- ・ 高齢者との触れ合いを通して、様々な立場の人の気持ちについて、相手意識をもって考えることができた。

6 成果

- ・ アスリートを招き、障害者スポーツを体験した結果、児童が障害者の立場になって考えるきっかけとなった。
- ・ 江戸川ボランティアセンターの方を招き、障害があることを体験する活動を通して、障害は特別なものではなく、自分たちの苦手なことと同じであるという意識をもたせることができた。また、障害のある人にどのように関わっていけばよいかを考えさせることができた。
- ・ 地域の高齢者施設を訪問し交流することで、人を楽しませることの喜びや、様々な立場にある人の気持ちを考えて行動することの大切さを学ぶことができた。
- ・ 外部講師と連携した学習を計画することにより、教師自身が障害者理解教育について学ぶことができた。

実践事例⑧ 八王子市立式分方小学校

1 取組・活動名

「パラリンピックを知ろう！体験しよう！伝えよう！」

2 取組・活動のねらい

- 障害者理解教育を推進し、本校の教育目標「役に立つ喜びを知る子」を育成する。
- 障害のある人や多様な立場の人がいる集団に、積極的に関わろうとする児童を育成する。
- 障害のある人が活躍するスポーツに触れさせ、東京オリンピック・パラリンピックへの学びの連続性をもたせる。

3 教育課程上の位置付け

「総合的な学習の時間・12時間」

4 実施上の工夫

- ・ 「運動の楽しさを知る」「オリンピック・パラリンピックへの関心を高める」「障害者と障害者スポーツを知る」ために、積極的に外部講師を活用した。
- ・ 障害者スポーツの特性を深く理解するために、障害のある人から話を聞いたり、実際に競技を行ったりする体験的な学習を行った。
- ・ 学習に対する興味・関心や意欲を持続させるために、特別支援学校との親善試合を設定した。
- ・ オリンピック・パラリンピック学習ノートに記録した学習内容を生かし、保護者や地域への発表を行った。

5 本取組・活動の内容



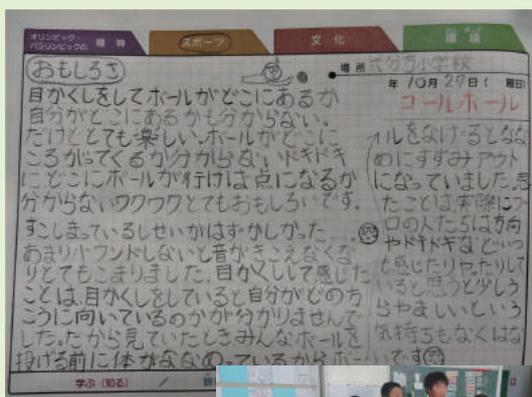
「ゴールボール体験」

- ・ ゴールボール体験では、目隠しをして準備運動をすることから始めた。いつもあたりまえに行っている準備運動も、手本の人がどんな動きをしているのかがわからず、他の児童が苦労しながら言葉で、運動の仕方を説明していた。
- ・ また、東京都立八王子盲学校と親善試合も行った。



「車椅子バスケットボール体験」

- ・ 車椅子バスケットボールでは、車いすの形が、病院などでよく見かけるものとは、まったく違うことに、驚いていた。
- ・ 実際に車椅子バスケットボールの試合をしてみると、運動が得意な児童もそうでない児童も、一緒になって、楽しそうに取り組む姿が見られた。



「オリンピック・パラリンピックノートの活用等」

- ・ 体験したり調べたりしたオリンピック・パラリンピック競技の感想や魅力などを、オリンピック・パラリンピック学習ノートに詳しく記録した。
- ・ また、ノートにまとめたことなどを、多くの人に知ってもらいたいという思いをもって、発表会にのぞむことができた。



6 成果

- ・ 障害者スポーツを実際に体験することで、障害への理解が進むと同時に、困難があるからこそ得ることのできる達成感を学ぶことができた。
- ・ 体験的な学習を積むことにより、オリンピックやパラリンピックをより身近なものとして考えられるようになり、そのことが学習意欲の向上にもつながった。また、ゴールボールクラブの創設に、児童が自主的に関わった。
- ・ 誰もがもっている苦手意識を、お互いに理解し合い、自分にできることを通して、役に立つとする意識が向上した。
- ・ オリンピアンとの交流の中で、本物の金メダルに触れさせてもらう等の体験から、より大きな感動を味わうことができた。
- ・ オリンピアンのお話を聞いて、選手の並大抵ではない努力を知ることができ、様々な競技の選手を応援しようという気持ちをもつようになった。
- ・ 話を聞いたり、調べたり、体験したりしたことを発表する機会を設定することで、学習したことを発信する力が向上した。

実践事例⑨ 日野市立夢が丘小学校

1 取組・活動名

「様々な人とともに生きる」

2 取組・活動のねらい

- 日常の成果を発表する中で、近隣の学校との交流をおこない親睦を深める。
- 障害の有無に関わらずお互いに理解・尊重できる共生社会を探究する。

3 教育課程上の位置付け

「総合的な学習の時間・20時間」

4 実施上の工夫

- ・ (事前・事後活動) 「点字の読み取り」「車椅子体験」「ブラインド歩行」などの活動を取り入れ、障害者の立場での体験を通して、障害者理解を深めたり共生社会の実現に向けてどのようなことができるかを追究したりできるようにした。
- ・ (交流に向けての配慮) 特別支援学校がどんなところでどんな児童・生徒が通っている学校なのかを知り、障害児も自分たちも同じ存在として捉えられるよう、七生特別支援学校の教員による「出前授業」を設定した。
- ・ (交流での場面設定) 児童同士が交流したり両校の親睦がより深まるよう、両校での取組の成果を発表したり、共同して一つのことに取り組む「三連フラフープリレー」や「パラバルーン」などの活動を取り入れた。

5 本取組・活動の内容



【三連フラフープリレー】

- ・ つないだフラフープ3つをバトン代わりにして、両校の児童が3人一組となったリレー競走を行った。
- ・ 3人でスピードをあわせることや、コーンを素早く回るため協力したり声をかけ合ったりする姿が見られた。
- ・ 3チームによる対抗リレーの方式をとったことで、児童同士での一体感が生まれた。



【パラバルーン】

- ・ 両校の児童が交互に並び、音楽に合わせてバルーンを膨らませた。
- ・ 音楽に合わせたステップなどは、当日七生特別支援学校の児童から教わった。息が合うごとにバルーンは大きく膨らんでいった。
- ・ 最後は、大きく膨らんだバルーンの中に、全員が入り、バルーンの中では、やり遂げた達成感から何ともいえない爽快な児童の笑顔が見られた。



【施設見学】

- ・ 七生特別支援学校の校内を見学し、教室の様子やプールなどを見学した。また、事前の出前授業で教わった教室の様子などを、実際に確認させてもらった。
- ・ 教室の広さやつくり、机の数、時間割の掲示の仕方など、自分たちが目にする教室のイメージとは異なる点に関心を持ち、質問コーナーでは多くの児童が手を挙げていた。

6 成果

- ・ 「学習発表会」での交流を行った翌日に、保護者を連れて七生特別支援学校に足を運んだ児童がいた。交流を通して、児童から地域に交流の輪が広がるとともに、特別支援学校に対する理解を高めることができた。
- ・ 七生特別支援学校に対して児童は漠然としたイメージしかもっていなかったが、交流を行ったことで、体験に基づくはっきりとしたイメージをもつことができるようになった。
- ・ 障害を克服するために「点字」や「スロープ」があることなど社会にはあらゆる人たちを支援するための工夫がされていることや、私たちにもできることがあることに気付くことができた。

実践事例⑩ 東大和市立第六小学校

1 取組・活動名

「障害者理解・ボッチャ体験活動」

2 取組・活動のねらい

- 児童がパラリンピック競技である「ボッチャ」の競技方法やルールを学び、実際に車いすに乗って体験をしたり、車いすを利用している方々と一緒に競技をしたりすることを通して、障害者を理解する心のバリアフリーを推進する。
- 児童が障害者スポーツを観たり体験したりすることを通して、パラリンピックや障害者競技への理解を深める。

3 教育課程上の位置付け

「総合的な学習の時間・4時間」

4 実施上の工夫

- ・ 指導のための団体や道具の手配を地域の方にコーディネートしていただき、学校の考えと団体の指導方針との調整が円滑に行われるようにした。
- ・ 事前学習を通して、児童が競技内容を理解し、興味をもった状態で競技に臨めるようにした。
- ・ 近隣の高齢者施設の方々を本校に招き、日常から車いすを利用している方々との交流を深められるようにした。
- ・ 実際に、講義・体験・交流を行うことにより、ルールや道具を工夫することで、障害がある方も一緒に競技を楽しめることを体感し、障害者への理解を深められるようにした。
- ・ 保護者へも活動を公開し、学校の取組を地域へも発信した。

5 本取組・活動の内容



- ・ ボッチャは、ジャックボール(白)と投げたボール(赤か青)の距離の近さで得点が決まる競技である。
- ・ ボールをコントロールするのは簡単そうに見えて、実際に投げしてみると、とても難しいことが分かった。



- ・ 障害の程度に合わせた競技道具があり、一緒に競技を楽しむ工夫を知ることができた。



- ・ 地域の高齢者の方々とも一緒に競技を行った。
- ・ 実際に車いすに乗った状態からボールを投げてみると、いつもとは違う姿勢からの投げ方に戸惑う児童もいた。
- ・ ボッチャ協会の方に、たくさんのことを教えていただき、障害のある方も、高齢者の方も、みんな同じように競技を楽しむことができる大切さを学んだ。



6 成果

- ・ オリンピック・パラリンピック競技に対しての興味・関心を深めることができた。
【児童の感想】「これからはボッチャを応援しようと思いました。」
「どんな人でもできるので、だれに対しても優しい競技だなあと
思いました。」
「いろいろな障害がある人でも、その人に合わせてできるスポーツだということが分かりました。」
- ・ 活動を通して、児童が競技内容を理解することができた。
【児童の感想】「簡単そうだと思いましたが、実際にやってみるととても難しく、
教えてくださった人はすごいなと思いました。」
「ボールが重く、自分がねらったところにうまく投げられないことが分かりました。」
- ・ 活動を通して、児童が障害者の方々の気持ちに寄り添うことができた。
【児童の感想】「車いすを使って生活している人も競技を楽しむためのルール
や工夫がたくさんあって、びっくりした。こういう工夫をすることが大切なんだと思いました。」
「車いすで障害のある人と協力してできたことがよかったです。」

実践事例⑪ 多摩市立連光寺小学校

1 取組・活動名

「3年 東京都立多摩桜の丘学園の友達と仲良くなろう」

2 取組・活動のねらい

- 地域の特別支援学校児童との交流をとおして、共生社会を達成するための第一歩としての障害者理解を促進する。
- パラリンピック競技種目「ボッチャ」を体験し、パラリンピックや障害者スポーツへの関心を高める。

3 教育課程上の位置付け

「総合的な学習の時間・23時間」

4 実施上の工夫

- ・ 第1回の交流前に、交流校の特別支援教育コーディネーターによる、障害理解推進授業（出前授業）を実施し、交流校の学校や児童の様子を理解した上で、児童の交流を開始した。
- ・ 第1回目の交流を実施し、交流校の児童の実態を把握した上で、児童が第2回以降の交流内容を考えていけるように計画した。
- ・ 交流校児童とともにを行う活動に、パラリンピック種目「ボッチャ」を取り入れた。事前に東京都障害者スポーツ協会指導員を本校に招き、児童と教員が「ボッチャ」のルールやゲーム運営に関する指導を受けた。この工夫により、交流当日はスムーズに活動を展開することができた。

5 本取組・活動の内容



「障害理解推進授業（出前授業）」

- ・ 交流校の多摩桜の丘学園特別支援教育コーディネーターを学校にお迎えし、学校紹介や児童の様子について、画像を提示しながらご紹介いただいた。
- ・ 近隣の学校ではあるが、ほとんどの児童は校内に入ったことはなく、実際の交流の前に貴重な事前学習の場となった。



「児童が自ら考える交流会」

- ・ 交流校で実施した第1回の活動で学んだことをもとに、児童は本校で実施する第2回の交流内容を自ら計画し、準備を進めた。
- ・ 交流会の当日は、相手校の友達に寄り添ったり手をつないだりする姿が見られ、相手の立場に立って交流を進めることができた。



「パラリンピック競技種目のボッチャ交流」

- ・ ボッチャは、障害者と健常者が同じチームとして取り組むことが可能なスポーツの一つである。
- ・ 交流校とのボッチャ交流を前に、東京都障害者スポーツ協会の指導員を招き、ボッチャのルールや運営方法を学んだ。
- ・ ボッチャを交流校と行うことで、応援しながら楽しく取り組むことができ、パラリンピックへの関心も高まった。

6 成果

- ・ 特別支援学校の児童とのふれあいをとおして、相手を理解し寄り添う気持ちを育むきっかけをつくることができた。
- ・ 特別支援学校教員による出前授業をはじめ、パラリンピック競技種目のボッチャによる交流や児童が自ら考えた遊び交流など、3年生を中心とした特別支援学校との交流のモデルを作成することができた。
- ・ ボッチャを交流校と体験することで、パラリンピック種目への関心が高まり、障害者および障害者スポーツへの理解が深まった。

1 取組・活動名

「だれもが関わり合えるように」

2 取組・活動のねらい

- 障害のある方の話を聞いたり、疑似体験をしたり、障害のある方の自立支援に関わっている人の話を聞いたりすることを通して、社会には自分とは違う生活をしている人達がいることに気付く。
- 自分がどのように障害のある方と関わり合いをもったらよいのか考え、自分の生き方につなげようとする。

3 教育課程上の位置付け

「総合的な学習の時間・33時間」

4 実施上の工夫

オリンピック・パラリンピック教育との関連でパラリンピック競技「ボッチャ」を体験する。

自分たちで調べたことをさらに実感できるように、盲導犬を利用している方の話を聞いたり、手話体験、点字を打つ体験、認知症サポーター養成講座を受講したり、車いす体験や高齢者疑似体験セットの着用、アイマスクの着用を行うことにした。

話し合いをする際にホワイトボードを用いて、分担をする方法を考えた。全員が話し合い活動に積極的に参加できるようにホワイトボードミーティングを取り入れた。

5 本取組・活動の内容



「盲導犬体験」

- ・ 盲導犬使用者の方から、実際に盲導犬を使用している時の気持ちなどを聞き、分からないことを質問した。あらかじめ、聞きたいことを考えておくことで興味をもって話を聞くことができた。
- ・ また、実際に盲導犬を連れて歩く姿を目の当たりにしてあらためて視覚障害者との関わり方を考えることができた。



「ボッチャ体験」

- ・ パラリンピック競技、「ボッチャ」を体験した。ボッチャはどんな障害がある人達が楽しめるスポーツなのかを学び、実際に競技をしてみた。
- ・ 障害の有無にかかわらず、誰もが楽しめるスポーツという点に子供たちは非常に興味をもっていた。障害者とも一緒にスポーツができることに気付くことができた。



「高齢者疑似体験」

- ・ 社会福祉センターから高齢者疑似体験セットを借り、お年寄りの日常生活の不自由さを体験した。体の動かしにくさや、視界の狭さなど、お年寄りの大変さを実感することができた。
- ・ 体験後には、お年寄りとどのように関わったらよいのか、重い荷物を持っていたら助けたい、電車で席を譲りたいなど意識を高められた。

6 成果

- ・ 子供たちが体験活動で学んだことから、実際にどのように関わりたいか積極的に考えて話し合い活動ができた。

ホワイトボードを活用したことで、内容が可視化できて全員の考えが見られ、話し合いが活発に行われた。今後、子供たちのやりたいと考えたことをいかに実行に移していくかが課題である。

オリンピック・パラリンピックの競技を経験したことで、オリンピック・パラリンピックへの興味・関心もてるようになった。

1 取組・活動名

「障害者理解の促進・障害者スポーツ、企業と連携した協力授業」

英語の授業でのボッチャの紹介、パラリンピアンを題材とした道徳の授業、東京都教育委員会の映像資料を用いた障害者スポーツ(ボッチャ)の理解、障害者アスリートの講演・実演・体験(ボッチャ)、民間企業と連携した授業等を実施した。

2 取組・活動のねらい

- スポーツマンシップ、不屈の精神、たゆまぬ努力など、アスリートの生き方に目を向け、自分の生き方を考えさせ、人間尊重の精神を培い、心のバリアフリーを進める。
- パラリンピックスポーツを通じてインクルーシブ(障害者も健常者も共に生きる社会)な社会を創出する
- 多様な個性をもつ人々との共生のあり方や、共生社会を実現する上での問題を考えることを通して、共生社会を実現するために自分ができることを具体的にとらえる。

3 教育課程上の位置付け

「英語・1時間」「道徳・3時間」

「総合的な学習の時間・1時間」「特別活動・1時間」

4 実施上の工夫

- ・ 東京都教育委員会の映像資料「広げよう！障害者スポーツ」を活用したり、英語や道徳の授業でボッチャについて理解したりした上で、ボッチャ日本代表選手の講演・実演・体験に臨めるようにした。
- ・ 各教科、道徳、総合的な学習の時間、特別活動など横断的に障害者理解教育を行い、より効果的に実施できるようにした。
- ・ 障害者理解教育のまとめとして、パナソニックとの協力授業を行い、「共生社会」の実現に向けて自分には何ができるかを考えさせた。

5 本取組・活動の内容

英語「Let's learn about the Paralympic Games!」



- ・ 3年生を対象に、パラリンピック競技の中でもボッチャを取り上げ、そのルールを英語で説明し、理解する内容の授業を実施した。
- ・ パラリンピックにはほとんどの生徒が関心がなく、リオデジャネイロパラリンピックの映像を観るところから始めた。
- ・ ボッチャを知る生徒もほとんどいなかったので英語の学習のみならず、ボッチャの競技の理解にもつながった。

「ボッチャ日本代表選手の講演・実演・体験」



- ・ 東京都ボッチャ協会の方、日本代表強化指定選手に来校いただいた。
- ・ 東京都教育委員会が作成した障害者スポーツのDVDを全校生徒で視聴し、あらためてルールを確認したり、道徳の授業では東京都から出されている「ボッチャ」という題材を扱ったりして学習を行った。

生徒の感想から 「自分の周りの良いところを探してください」という言葉が印象に残りました。そこを探すことでもっと友達との仲のよい関係が築いていけると思いました。

「企業との協力授業」



- ・ 本校の教育理念が「共生」であり、この企業と行う授業のねらい「多様な個性をもつ人々との共生のあり方や、共生社会を実現する上での問題を考えることを通して、共生社会を実現するために自分ができることを具体的にとらえる。」を達成することが、2学期を中心に行ってきた「障害者理解の促進」のまとめになると考え、実施した。
- ・ この企業の工場で障害者が働いている映像資料などから共生社会実現のために自分には何ができるのかを考えた。

6 成果

- ・ パラリンピックや障害者スポーツについて身近に接することで、特別なものではないと感じることができた。またパラリンピアン生き方を知ることで、自分の生き方を振り返り、他者を尊重しようとする姿勢が身に付いた。
- ・ 東京2020大会で、学区である晴海地区に選手村ができることを踏まえ、実際に生徒が障害者と接するときどのように対応すべきなのかを考えることができた。
- ・ パラリンピック教育を通して、障害者を特別視せずに接しようという姿勢が身に付いた。

実践事例⑭ 練馬区立貫井中学校

1 取組・活動名

「スポーツイベント（12分間走大会・キンボール大会）」

2 取組・活動のねらい

- 体育委員会主催の行事を企画・実施することで、達成感と自信を身に付けさせるとともに、他の生徒にも主体的・計画的に取り組むことの良さを感じ取らせる。
- 始業前、昼休みを使って体力向上に向けた取組を行い、生徒の運動やスポーツへの興味、関心、意欲を高める。
- 運動は誰でもどこでも気軽に親しめるものであるという感覚を養い、誰とでも楽しく運動に親しめる資質を育てる。

3 教育課程上の位置付け

「保健体育・1時間」「特別活動・始業前と昼休み」

4 実施上の工夫

- ・ 体育委員会が運営の中心となることで、どんな生徒でも自覚をもって取り組み、主体性を育むことができ、自分たちで企画・運営ができるようになるのと指導した。
- ・ 運動・スポーツへの関心を高めるため、走ることが好きな生徒のための「12分間走」と、運動が苦手な生徒でも参加できる「キンボール大会」の2本立てにした。
- ・ 保健体育（体育理論）「運動・スポーツの多様性」の単元で「キンボールスポーツ」を題材にした授業を行い、キンボールへの興味をもたせる工夫をした。

5 本取組・活動の内容



「保健体育（体育理論）」（9月実施）

<運動・スポーツの多様性>

- ・ キンボールを題材にし、運動やスポーツの「行う」「見る」「支える」の観点から大会を企画することを課題として学習を進めた。
- ・ 3つの観点から大会運営を学び、さらに今まで知らなかったスポーツを学ぶことで、様々な運動・スポーツの関わり方を学習することができた。



「12分間走大会」（11月実施）

- ・ 始業前に体育委員会主催で実施した。
- ・ 希望者のみの参加で、全校生徒の3分の1程度が参加した。運動部に所属している生徒が多かったものの、普段運動をしていないので体力を高めたいという意識で参加した生徒もいた。
- ・ 3日間実施し、各学年男女別で3日間の合計距離が一番長かった生徒を朝礼で表彰した。



「キンボールスポーツ大会」（12月実施）

- ・ 昼休み時間に体育委員会主催で実施した。
- ・ 4人1組で学年男女別対抗を行い、各学年優勝チーム男女各3チームと教員チームで決勝戦を行った。
- ・ ルールが簡易ですぐに取り組めること、準備がほとんど必要ないこと、体力や技能による差があまりないことから、学年を超えて楽しく取り組むことができた。

6 成果

- ・ 12分間走に参加した生徒が予想以上に多かった。みんなと一緒に走ることで連帯感や充実感を感じ、楽しさを覚えることができた。
- ・ 今まで知らなかったスポーツに触れることで、これまでとは違う運動やスポーツの楽しさを知り、興味、関心、意欲を高めることができた。
- ・ 運動が苦手な生徒でも楽しむことができるスポーツがあること、体が不自由でもできるスポーツの存在を感じ取ることができた。
- ・ 運動の得手不得手に関わらず、楽しむことができるようにするにはどうすれば良いかを生徒自身が考えることで、他者を思いやる気持ちを育むことができた。
- ・ 生徒主体で企画を行ったことにより、生徒自身が大会の企画や運営の方法を学ぶ機会となり、次年度への弾みとなった。
- ・ 保健体育の授業で学んだ学習内容を、「始業前の時間」や「昼休みの時間」という中学生にとって「日常」の機会に生かすことができた。

実践事例⑮ 多摩市立聖ヶ丘中学校

1 取組・活動名

「東京都立多摩桜の丘学園とのボッチャを使った交流」

2 取組・活動のねらい

- 同じ学区内にある都立多摩桜の丘学園の様子を教員と生徒が理解する。
- 障害のある生徒との交流や理解を促進し、共生社会の実現を目指す。
- 東京2020大会、正式種目・ボッチャの活動を通じて、オリンピック・パラリンピックや障害者スポーツへの関心を高める。

3 教育課程上の位置付け

「総合的な学習の時間、道徳・6時間」

4 実施上の工夫

- ・ 校内の教職員研修の一貫として、都立多摩桜の丘学園を訪問し、特別支援学校の施設や教育活動や、特別な支援を要する生徒への具体的な支援の内容などを学んだ。
- ・ オリンピック・パラリンピック学習読本を活用し、ボッチャについての事前・事後学習を行った。
- ・ リオデジャネイロ2016パラリンピック競技大会に出場したパラリンピアンを招へいし、講演会を開催することで、障害者スポーツに対する生徒の理解を深めた。
- ・ ボッチャの活動交流会では、優勝カップを本校生徒が製作し、表彰状を都立多摩桜の丘学園の生徒が制作するなど、生徒中心の交流会になるよう工夫した。

5 本取組・活動の内容



「本校教職員による、都立多摩桜の丘学園での研修会の様子」

- ・ 特別支援学校の施設の概要が理解できただけでなく、本校の教職員が、障害のある生徒の特性に対する配慮すべき事項などについて理解を深めることができた。



「当日のボッチャによる交流の様子」

- ・ 本校の生徒と都立多摩桜の丘学園の生徒がチームを組んで、ボッチャを行った。
- ・ 同じチームとなった生徒同士は、始めに自己紹介を行ってからゲームに臨んだことで、親近感をもって活動を行うことができた。



「表彰式後の記念撮影の様子」

- ・ 本校生徒が制作した優勝カップと都立多摩桜の丘学園の生徒が制作した表彰状を掲げている。
- ・ 最初はお互いに緊張した様子だったが、ボッチャの交流を通じて、次第に打ちとけた。

6 成果

- ・ 特別支援学校の生徒と接することで、手をとったり、車いすを押ししたりするなど、生徒の温かい気持ちを引き出すことができた。
- ・ ボッチャという競技にふれることで、東京2020大会への関心を高めることができた。
- ・ 交流を通して、障害の有無に関わらず、「将来に対する夢や希望を持つ中学生であること」に気付くことができた。

実践事例①⑥ 東京都立八王子盲学校

1 取組・活動名

「障害者理解促進校取組」

2 取組・活動のねらい

- 東京オリンピック・パラリンピック大会に向けてシンボルマークを作成し、幼児・児童・生徒の興味、関心を高める。
- オリンピック・パラリンピック教育推進重点校として、視覚障害スポーツを通じて障害者についての理解、啓発に関わる内容を行い、外部へ積極的に発信をし、障害者への理解を深める。
- オリンピアンを招き、幼児・児童・生徒のスポーツに対する意識や競技能力、体力の向上を図る。また、視覚障害者が運動しやすい環境を整える。

3 教育課程上の位置付け

「総合的な学習の時間、美術・7時間」

- ・ 美術「エンブレム制作」
事前指導1時間 制作活動2時間
- ・ 総合的な学習の時間「パラリンピアン、地域の小学校交流」
事前指導1時間 交流2時間 事後指導1時間

4 実施上の工夫

- ・ 幼児・児童・生徒が「楽しい」「おもしろい」と思える企画を考えた。オリンピック・パラリンピック委員会を立ち上げ、各学部の意見を反映させながら全校的に取り組んだ。
- ・ 地域の小学校を招き、視覚障害スポーツの交流試合を行い、テレビアナウンサーの実況やゴールボール日本代表のコラボレーションの講話を聞くなど、積極的に他団体と連携を図った。
- ・ 陸上競技のオリンピアンを招へいして、幼稚部から高等部普通科まで実際に実技指導を行い、競技力向上を図った。

5 本取組・活動の内容



- ・ 美術科では、触れるエンブレムを校内に設置し、触って確認できるようにしたいと考えた。また、そのエンブレムを在籍する幼稚部から高等部の幼児・児童・生徒みんなの手で作りたいという思いの元、エンブレム制作の計画を立てた。
- ・ オリンピックとパラリンピック両エンブレムのデザインが形も数も同じパーツで構成されていることを知り、2つの大会が同等に扱われるようにとデザインに込められた作者の願いについても学んだ。体育館の入口に掲示して、いつでも触れて、見られるようにしている。



- ・ 八王子市立式分方小学校6年生を招き、ゴールボールの交流試合を中心とした特別授業をした。
- ・ アナウンサー、本校卒業生でゴールボール日本代表選手、本校教員でブラインドサッカー日本代表の黒田教諭による2020年に向けての対談も開いた。

八盲にゆかりのアスリートからのメッセージ

このコーナーでは、八盲にゆかりのあるアスリートの方々の活躍を、いただいたメッセージと写真を通してご紹介いたします。今後、新しいメッセージが掲載次第、順次掲載内容を追加していく予定です。掲載第1号は、ブラインドボウリング選手として活躍中の高木綾子さんです。



高木綾子さん(ブラインドボウリング選手)
平成7年産 高等部専攻科修了

紹介

高木さん(旧姓長瀬さん)は、小守童8年の2学期から高等部専攻科理科専攻科まで9年半、八王子盲学校で学びました。現在は、パークレイズ証券株式会社という外資系金融・証券会社の人事室で働きながら、ブラインドボウリングの選手として活躍中です。

- ・ 八王子盲学校のゆかりのあるアスリートからのメッセージを、ホームページに掲載している。
- ・ 視覚障害スポーツの情報を発信し、一人でも多くの方に関心をもってもらうことを目的としている。
- ・ 今後、ゴールボール、ブラインドサッカー、水泳、陸上など様々な視覚障害スポーツを月1回紹介する予定である。

6 成果

- ・ オリンピック・パラリンピック教育重点校の予算を活用して、視覚障害者が安心して、安全に運動することができる環境を整えることができた。
- ・ オリンピック・パラリンピック給食では、教員の故郷の料理を紹介して、日本各地のことについて深く知ることができた。その土地の文化や歴史について学ぶことができた。
- ・ 地域の小学生と交流して、視覚障害スポーツの啓発を行い、主体的に交流することができた。また、卒業生のゴールボール日本代表を招いた講話から、2020年に向けて努力することの大切さを学んだ。